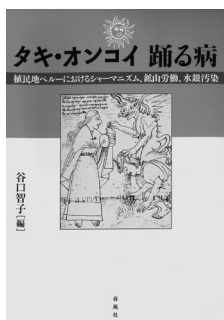


書評



谷口智子編

『タキ・オンコイ 踊る病』

— 植民地ペルーにおける

シャーマニズム、鉱山労働、水銀汚染』

春風社、2023年2月

評者 田中 雅一

国際ファッション専門職大学・国際ファッション学部

本書は、16世紀ペルーの高山地帯で起こった水銀中毒に関する書籍である。所は地球の反対側の南米のペルー、時は日本では室町から安土・桃山時代。空間的にも時間的にもこれほどかけ離れた「事件」が、現代に生きる私たちにどのような意味をもつのだろうか。はたしてどのような知見を水俣病に携わってきた人々にもたすのだろうか。そのような期待と不安を抱きながら、本書を読み始めた。

本書は、南米を専門とする宗教学者で本書の編者でもある谷口による短い序と結に挟まれた8章からなる。構成は以下の通りである。

第一章 人類の宗教史における水銀とシャーマニズム

——タキ・オンコイを理解するための序論 [谷口智子]

第二章 スペイン帝国下のアルマデン水銀鉱山——その歴史と水銀中毒 [立岩礼子]

第三章 「囲いに入れられた神」と「赤く顔を塗られた神」 [谷口智子]

第四章 一六世紀ペルーにおけるタキ・オンコイと水銀

[ルイス・アルベルト・サンタマリア・ファレス (谷口智子 訳)]

第五章 タキ・オンコイにおける人体への水銀汚染をどうとらえるのか [中地重晴]

第六章 タキ・オンコイ、憑依、ハサミ踊り [谷口智子]

第七章 タキ・オンコイから鉱山の悪魔まで——その社会的アプローチ

[ルイス・アルベルト・サンタマリア・ファレス (谷口智子 訳)]

第八章 アンデスの創造力における「収奪」のイメージ

——タキ・オンコイとピシュタコ及びコンパクタード [谷口智子]

以下、順に紹介する。

タキ・オンコイは、スペイン統治下の16世紀半ばにペルーのワマンガ地方のワンカベリカ水銀鉱山（1975年に閉山）で起こった、急激な産業化やそれに伴う労働システムに対する先

住民の反乱を指す。それは、1560年から1571年まで続いた。踊る病や歌い病と称され、水銀鉱山での過酷な労働を強いられた先住民たちによる反スペイン的な、憑依を伴う宗教運動ともストライキやサボタージュとも理解されていた。しかし、最近になって彼らは水銀中毒の患者ではなかったか、憑依は震えであり歌は奇声ではなかったかと指摘されるようになったという。当時の様子は巡察使であったクリストバル・アルボノスによって『功績報告書』に記録されている。

第一章で谷口は、宗教と水銀との関係を紹介している。例えば中国で水銀（その化合物である辰砂）は不老不死の薬（丹薬）として珍重されてきた。インドで水銀はシヴァ神の精液であり、若返りの薬であった。日本では、空海の高野山造営と硫化第二水銀（朱）の採掘を生業とする紀伊丹生氏、彼らが信仰していた水銀の神（丹生明神）との間に密接な関係があったという。また、ヨーロッパの錬金術に関係し、赤い辰砂（硫化水銀）が墓地や遺体で使用されていたことが分かっている。本書の舞台であるアンデスにおいて水銀（そして水銀鉱山）はワカ（聖なるもの）であった。それは人間がコントロールできないものであり、時に山の神ティオとして神格化された。

第二章で、歴史学者の立岩は、世界最大の水銀（辰砂）鉱山、スペイン内陸部にあるアルマデン鉱山について紹介している。17世紀以後主たる労働力は、受刑者、浮浪者や非キリスト教徒（ユダヤ人、イスラーム教徒、ロマ）、奴隷などであった。アルマデンでは水銀を加熱した際に生じる蒸気や、抽出した水銀を手にとることで水銀中毒が生じた。例えば1684年に100人の囚人が鉱山で働いていたが、そのうち20人が中毒で「役立たず」であった。18世紀半ばになって水銀中毒を発症した鉱夫専門の病院が設立された。一方、受刑者でも奴隷でもなかった中南米の先住民には、17世紀初頭に水銀中毒への対応が図られたという。

第三章で谷口は、16世紀半ば（1564年）に発見されたワマンガ地方のタキ・オンコイは、ワカ（聖なるもの）が人々に憑依するという新しい現象を伴っていたが、この「憑依」の性格は抑圧されている人々が異議申し立てをする手段と理解されている周縁的憑依であり、水銀中毒の症状であった可能性が高いと指摘する。谷口は、シャーマンたちが囲いに入れられ、顔を赤く塗られたという『功績報告書』の記述に注目し、そこに豊穡を祈願する伝統的な家畜儀礼との連続性を認める。タキ・オンコイは、憑依するワカを信奉する「伝統復古的」宗教であり、反スペイン、反カトリシズムの運動であった。その上で、谷口は赤い塗料は水銀（辰砂）であろうと推察している。さらに、タキ・オンコイの発見は、ワンカベリカ水銀鉱山が操業を開始したのと同じ1564年であり、この鉱山の周辺で発生している事実から、ここで働いていた先住民たちが水銀中毒に侵されていたと思われる。以上から、谷口は「タキ・オンコイの中に度々見られる異常行動は、例えば、神経が侵されて平衡感覚が取れず、踊っているように歩く水俣病患者「水銀中毒」症状の表れだった可能性がある」（本書、91ページ）と述べる。

第四章で、保健管理学と人類学が専門のサンタマリアは、16世紀ペルーの年代記録者ワモン・ボマが残した図をもとに水銀鉱山の操業が先住民にもたらした症状や労働環境の改善に

について詳述している。ここで重要なのは、鉱山や精錬所で吸引した水銀蒸気による症状が地方の文化的イデオロムによって、つまりワカが体内に入ったとして当事者たちに理解されていることであろう。

環境化学と環境マネイジメント論を専門とする中地は第五章で、タンザニア側のヴィクトリア湖岸や都市部で調査を行い、水銀入り石鹸を使用している都市民の毛髪中の水銀濃度が高いことが明らかにした。一部には無機水銀中毒に見る症状が認められたが、中地はこれを一時的なものとみなしている。また、タキ・オンコイに見られる興奮状態と中毒との間に直接的な関係はないとする。この見解は、谷口やサンタマリアの議論とは大きく異なる（谷口は、結にてこの見解にたいし反論している）。

第六章で谷口は、サラ・カストロ・クラレンの論文を参照しながら、ホセ・マリア・アルゲダスの短編小説『ラス・ニーティの最期』で描かれているハサミ踊りにタキ・オンコイの名残を認める。そこに認められるのは、ワカの神々との憑依を通じての交流であり、死（破壊）と復活のテーマである。クラレンによると、タキ・オンコイの4つの要素、舞踏、説教、音楽、エクスタシーのうち説教以外は現在の芸能に継承されているという。小説で描かれているハサミ踊りの起源は、チャンカ族による聖なる石（水銀）の踊りに求められる。踊り手たちは水銀との交流（暴露）を通じてエクスタシーに入ったのである。それはまた、（次章によると）人体から水銀を排除するための「癒しのダンス」という性格を備えていた（本書、254ページも参照）。しかし、それはスペイン人にとっては、露骨な反スペイン、反キリスト教を掲げる千年王国運動であり、偶像崇拜、悪魔崇拜であり、徹底的な破壊の対象にすぎなかった。そして、水銀の採掘が産業化するにつれ、先住民は賃金労働者となり、聖なる石はただの石ころとなった。ワカに憑依された人々は病人へと変化した。

第七章は、本書のほぼ3分の1を占めているサンタマリアの論稿である。ここで著者は、タキ・オンコイに見られる水銀中毒の発生過程を論じている。まず、第六章を受ける形で、紀元前1400年頃から本書の舞台となるワンカベリカで集中的な水銀発掘が始まり、それによって水銀中毒が慢性化したと推定している。こうして、ワカとみなされた人間が生まれる（172ページ）。ここで鉱山労働の変化が詳述されているが、著者はタキ・オンコイを過酷な労働条件の改善運動であったとも述べている。本章での主要な節は、第3節「一六世紀のワマンガにおける水銀鉱業」の後半、タキ・オンコイが「発見された」とされる1563年から1572年までを扱った項「ワンカベリカの水銀鉱山」である。当地の鉱山を「発見」したスペイン人、アマドール・デ・カブレラとアルボノスとの駆け引きや、「呪われた者」についての解釈、アルボノスによるワカや偶像の破壊、またインディオが彼をどのように見ていたのかが詳述されている。タキ・オンコイはまた病気でもあり、キリスト教への改宗によって放棄されたワカによる懲罰であった。このため、人々は反キリスト教的な態度を取るようになった。しかし、サンタマリアは当地で起こった偶像破壊を宗教的な対立とは見ていない。背後にあるのは、鉱山開発の占有という経済的な動機だという。そこではアルボノスもまたたんなる道具にすぎなかった。サンタマリアはまた、鉱山の神が悪魔化したことやそれを指

す名前の相違が水銀曝露あるいは中毒の症状を表していると指摘する。この悪魔化は、発掘に従事する鉱夫たちにも及ぶ。

第八章のテーマは、首を切って血や脂肪を取り去るアンデスの吸血鬼ピシュタコについてである。谷口によると、ピシュタコには、首斬り、脂肪をとる、よそ者の3つの特徴が認められる。首斬りは、ピシュタコが供犠の執行人であり、聖なるものに関わる両義的な存在であることを示唆している。脂肪は政治力や創造力、混沌からの回復力を表すため、その収奪はこのような力を喪失することを意味する。ピシュタコは、現地の人間や神と互酬関係にないか、それに失敗したよそ者である。先住民たちは、植民地主義による歴史的な危機を克服するためにピシュタコという神話的存在と結び付けて、彼らが直面している現実を理解しようとしてきたこと、またその犠牲者は水銀中毒で痩せ細った人間を想起させると谷口は指摘している。

以上が、タキ・オンコイに関する本書の紹介である。タイトルの踊る病やサブタイトルのシャーマニズム（ほとんど触れられていない）、鉱山労働、水銀汚染にひかれて本書を手にとった人も多いのではないかと推察されるが、索引やグロスサリーがないため、スペインや中南米の歴史を専門としない読者には全体を把握するのはかなりきびしい。また、各章のつながりや量的なバランスも必ずしも分かりやすいものではない。その理由の一つは、谷口の既出論文が含まれているため、どうしても全体の流れが途切れてしまうと同時に内容的に繰り返しが多い印象を与えるからと言えよう。また、本来ならペルーやスペインといった地域的・歴史的限定を超えて、水銀汚染に関心のある読者との橋渡しをするはずの中地論文が、本書の主張と対立していることも、本書全体の主張を弱める結果になっているように思われる。さらに当事者の視点を重視するという谷口の主張にもかかわらず、サンタマリア論文に見られるような物質主義的あるいは還元主義的な議論が散見されるのは残念である。とはいえ、限られた史料しか入手できない状況で、神話や儀礼、芸能を念頭に、当時の民衆の想像力・創造力に肉薄している点については大いに評価したい。

ここで冒頭の問いに戻ることしよう。水俣病に関心のある読者は、本書から何を学ぶことができるのだろうか。時間的にも空間的にも遠く離れてはいても、タキ・オンコイと水俣病との類似性を見出すことはさほど困難ではない。水俣病の原因とされるメチル水銀化合物を海に排出していたのはチッソであった。チッソが水俣工場を開いたのは1915年で1932年にはアセトアルデヒドの稼働を開始した。それと前後して1927年に朝鮮半島に進出している。チッソにとって九州の辺境に位置した水俣もまた植民地の延長という意識が強かったのではないか。一方、地域住民にとってチッソは日本経済の発展を推進してきた近代主義の象徴であり、地域経済の発展にとって不可欠な存在であった。このチッソに異議申し立てをすることは、そこで働く多くの地域住民を敵に回すことであり、また高度成長期に向けて邁進する日本経済や、さらには近代のプロジェクトに抗することを意味した。では近代の闇を暴こうとするこの長くて困難な運動を可能にしたのは何だったのか。

水俣の漁師たちの証言や石牟礼道子の小説を通じて繰り返し語られるのが、イオ（魚）湧

く海と称される豊かな不知火海での営み、「のさり」（天のめぐみ）とともに生きてきた暮らしである。そこには個人や人間という枠を超えた命のつながり（互酬性）という考えが認められる。原初的な宗教意識とも言えるこの生命主義こそが、水俣病で苦しむ人々に尊厳を与え、彼らの正義に道を開く思想ではなかったか。これが、発症後短期間で亡くなった人を葬り去ることなく、胎児性水俣病で生まれてきた人を排除することも過度に偶像化することもなく、同じ人間として受け入れようとする態度を可能にした。これが、魚を商品としかみない商業主義や労働者をシステムの一部としかみない資本主義を乗り越える視点を打ち立て、当事者を超えた広がりをもつ運動へと導いたのである。

本書に繰り返し登場するのは、ボリヴィアの鉱山を調査したジェーン・ナッシュが紹介している「我々は鉱山を食べ、鉱山は我々を食べる」という言葉である。それは、産業化以前の人々と山の神との互酬的関係を示唆すると同時に、植民地支配による産業化が進むにつれて生じる鉱山や労働者の搾取を前提とする敵対的な関係をも示唆している。本来両義的な山の神は、産業化とともに悪魔へと変貌する。外部から進出して地域共同体を切断し、多くの賃金労働者を生み出し、自然を汚染する巨大なシステムに対抗できるのは、政治闘争でも、裁判闘争でもない。それは自然と人間とが日常的に営む互酬性であったことを、本書は雄弁に語っている。このような思いに至ったという点でも、本書の試みは十分に成功していると評価したい。